

# 宗教の平和への貢献

## ——仏教真理を手がかりとして——

99K058 大沼貴史

### はじめに

まず私が卒業論文「宗教の平和への貢献——仏教真理を手がかりとして——」を書こうと考えたきっかけを述べたい。

まずは昨今の世界情勢における「戦争」と「宗教」の関係が取だたされてきているということである。

ここ最近での戦争。それは「アメリカ合衆国キリスト教世界 vs. 中東イスラーム世界」であるといわれている。9.11米国同時多発テロに端を発するアメリカの対テロリスト報復攻撃。それから現在に至るイラク戦争。

このような流れの中でKey pointになってきたのは宗教ではないだろうか。本質的な戦争原因ではないにしろ各国兵士のアイデンティティのなかには自らが信仰する宗教の考え方方が存在し、また各国首脳はこのアイデンティティとしての宗教を利用して兵士たちに戦争をさせようとする。

私をこの現状に対して以前から怒りとも悲しみともつかない憤りを感じてきた。私は仏教を信仰している仏教者である。であるから私のアイデンティティの中には深く宗教、仏教というものが染み付いている。その私の考え方からすれば戦争と宗教が関係していることは信じられない、信じたくないことである。人類の幸福を願い実現させるためにあるであろう宗教。何の罪のない人々が苦しみなくなっていく戦争。戦争の正当化の理由として宗教を利用する国家元首、首脳陣。その現状を「宗教の対立が戦争を生む」というような報道で、さも真実のように書き連ねる報道関係者。そのような報道を鵜呑みにし、ただただ傍観している一般市民。このような人々に宗教とは、人類の平和の実現のためだけに存在し、けっして人類を苦しめるためには存在しない。このようなことを考えているやつもいるんだ。もっと世界に起こっていることを身近に考えようよ。このようなことを私は伝えたい。そのような考えでこの論文を書くことにした。

以上がこの思索のきっかけである。

### 思索方法

次に具体的な思索に入っていくわけであるが、その前にその思索方法として、明らかにしていくべきだと思うことをあげる。つまり目次のようなものである。

私はこの提題を考えていくにあたり以下にあげる4つのテーマをあげて考えていきたい。

第1章 法華経の考え方

第2章 仏教における「平和」の定義

第3章 平和のために世界市民がすべきこと

#### 第4章 現代社会における仏教の果たすべき役割

最後に付け加えておくが、私が「仏教」という概念を用いるときは私が信仰している「法華経」の概念を使用し、その法華経は私が入会している立正佼成会の教義に準ずるものを用いる。それでは具体的な内容に入っていくことにする。

#### 第1章 法華経の考え方

この法華経は釈尊が涅槃に入る間際、残される弟子たちに対して最期に説いた教えであるとされている。その内容は仏教で初めて釈尊の根本的な考え方方が体系化されたものである。この法華経は法華三部経として三つの經典をセットにして考えている。「無量義経」(むりょうぎきょう)、「妙法蓮華経」(みょうほうれんげきょう)、「仏說觀普賢菩薩行法経」(ぶっせつかんふげんぼさつぎょうほうきょう)の3つである。

「無量義経」は「妙法蓮華経」を説く前に同じ場所でとかれた教えである。役割としては、その後にとかれる「妙法蓮華経」の重要さ、を補足するものであり、「妙法蓮華経」の前提としてとかれたものである<sup>(1)</sup>。

「妙法蓮華経」とは名前のとおり法華経の中心であり、法華経というときにはこの「妙法蓮華経」だけをさす場合がある。この「妙法蓮華経」は二十八品からなり<sup>(2)</sup>、釈尊の考え方方が体系的にまとめられておりすべてのエッセンスがたとえ話<sup>(3)</sup>や体験談として網羅されている。

「仏說觀普賢菩薩行法経」とは最後の最後に説かれた教えであり、「妙法蓮華経」の最後の品「普賢菩薩勸發品第二十八」(ふげんぼさつかんぼつほん)からつながっている。その内容はすべての人が誰しも平等に仏になれる教へである「妙法蓮華経」で学んだ人は誤った解釈をするとそれはおごりになってしまふ。よって「妙法蓮華経」の内容を実現させるためには自らを振り返り、正しい行いをしなければならないという「懺悔」(仏教的には‘さんげ’と読む)の教えがとかれている<sup>(4)</sup>。

以上概要を簡単に流したものであるが、次に基本的な考え方をあげていく。

法華経は「末法の世」のために残された教へである<sup>(5)</sup>。末法の世である現代に住むわれわれが少しでも菩薩に近づきこの困難を乗り切るために教へである。この菩薩というのは仏教者には3つの段階が存在する、仏子(ぶっし)、法師(ほっし)、菩薩(ぼさつ)の3段階である。仏子とは信仰に目覚め、「自分には仏性があるんだ」すなわち「がんばれば自分も仏になれるんだ」ということに気付いた段階<sup>(6)</sup>。

法師とは出家しようとしないと、男であっても女であってもいやしくも仏の教へを信じ、たもち、そしてそれをこの世の中に広める努力をなすものの段階<sup>(7)</sup>。

最後に菩薩とは前の段階から一步前進してより世の中のことを考え、すべての人々つまり一切衆生を救いたいとがんばっている人の段階である<sup>(8)</sup>。

世の中のためには自分の能力をどのように發揮していくべきか考えていくかがPointになってくるわけだが基本的には自らが信じるままに行動しなくてはならない。そのことは「自らを灯明として努力せよ」という「自灯明」という考え方がある<sup>(9)</sup>。しかしいくら自らの考えを灯明として努力していくても必ず壁にぶち当たるであろう。そんなときはこの法華経を読み返し、改めて真理とはどういうものであるか、自分は間違っていないのか、というような疑問の解決方法としてこの法華経が存在する。「法灯明」という考え方であるが<sup>(10)</sup>、自らの明かりでは足りないときには、もうひとつの灯明として法華経が存在する。よって実際に行動してみて困難に

あたらぬ限りこの法華経は難しすぎて本当の意味での理解は訪れない。

以上が法華経の基本的考え方である。このとおりだと現在の世界の状態に対して使用できないのではないかとの意見が出てくるのかもしれない。しかし私はこの世界の中に存在する一人の人間であり、現在の状態を不満に思い、できることであるのならばこの状態を改善しようと考えている。つまり平和という問題は他人事ではなく自らの問題であるのだ。この問題を自らの問題として認識しているからその解決方法としてこの法華経を利用したい。自灯明であると同時に、法灯明であるのだから……。

## 第2章 仏教における「平和」の定義

この問題を解決するにあたり重要なのはすべての物事、事象を宗教的、仏教的、法華経的に解釈することなのではないか。そうすることで物事の本質が見えてきて問題が浮き彫りになるのではないかと考える。そこで対比される状態「平和」である状態と「戦争」状態を仏教的解釈で説明してみたい。ここでは「平和」という状態を仏教的に解釈していこうと思う<sup>(11)</sup>。

平和とはいってどうのような状態なのか。戦争がなければ平和なのか。貧困がなければ平和なのか。差別がなければ平和なのか。自由があれば平和なのか。私はどれも一見正しいのだろうけど、必要条件であっても十分条件ではないのではないかと考える。ではなにが十分条件なのだろうか。私はこう考える。「すべての人間の心が真に平安であるのならばそれは平和な状態であるだろう」と。

「すべての人間の心が真に平安である状態」そのような状態はどのような状態なのか。仏教の言葉でこの状態を表すのは「涅槃寂靜」(ねはんじやくじょう)といふ。

「迷いという迷いがすべて取り除かれて人生苦というものがすべてなくなり平穏な安定した生活が訪れること」これが「涅槃寂靜」の状態である<sup>(12)</sup>。「涅槃」と聞くとイコール「死」を思い浮かべる人がいるがそれは間違いである。涅槃とはすべてのしがらみというしがらみから解放されて安らかな状態に入ることという解釈が正解であろう。「死」という概念はその中のひとつでしかないのではなかろうか<sup>(13)</sup>。この「涅槃寂靜」の反対の意味で用いられるのは「一切皆苦」(いっさいかいく)という概念である。これは読んで字のごとく「この世界のすべての物事、事象はすべて苦しみでしかない」というものである。しかし私たちが実際に生活している世界、仏教的には「しゃば世界」はこの「一切皆苦」の世界であるというこの「一切皆苦」の世界から「涅槃寂靜」の世界に至るためにには2つの真理を悟らなくてはならないという。それは「諸行無常」と「諸法無我」の2つである<sup>(14)</sup>。

まずは「諸行無常」(しょぎょうむじょう)とは「すべての行い、物事は絶えず変化しておりそのままとどまっているようなことはない」という意味である。簡単にいえば「変化」という教えである。この言葉自体は平家物語の冒頭にも出てきており、学校教育の中でも暗記させられてきたり、時代劇やなんかでよく用いられてきたから聞き覚えが多い人は多いはずである。しかしこれの意味に関しては「すべてははかないものだ」などと誤解されているのではないか。しかし先にも書いたとおり「すべての行い、物事は絶えず変化しておりそのままとどまっているようなことはない」というのが正しい意味である。これはどういうことか。

たとえばゴムボールをただ机の上に置いておく。そのままにしておくとずっとその場所にとどまっているのかといえばそうではない。その空間に何もなければ動かないかもしれない。しかしそこには空気の流れが存在し絶えず流れている。またのっかっているボールで遊ぶために持

ち出すかもしれないし、その机に誰かがつまずいて落ちるかもしれない。一生とどまっているということはありえない。また人の心にしてもそうだ。AというひとがBという人のことが好きだとする。その気持ちはずっとそのままとまっているのだろうか。嫌いになるかもしれないし好きという気持ちに代わりはないにしろ絶えず関係していればその度合いが一定ということはないだろう。また疎遠になってもAのなかでのBの存在する領域はどんどん狭まっていくだろう。このようにすべては絶えず変化しておりそのままとどまっているようなことはない。これが「諸行無常」という考え方である。

次に「諸法無我」(しょほうむが)という考え方である。「この世のすべての物事は必ずほかのものとのつながりの中で存在する」という考え方で、これを簡単にあらわすと「関係性」ということである。

たとえば大、中、小3種類のマーカーがあるとする。ここで問題です。このなかで中くらいのマーカーに注目してほしい。大きいものと比べればそのマーカーは「小さい」。小さいものと比べればそのマーカーは「大きい」。ではそのマーカーは「大きい」か「小さい」か。答えは「わからない」である。ここで言いたいのは、評価というものはそれとは別のものと比べないかぎり存在しないということだ。そのものひとつしかなければ「大きい」か「小さい」か、「使いやすい」か「使いにくい」かわからない。人間関係にしてもそうだ。「あの人頭いいよね」と誰かが言った。この時点でのひとは対象とは別のものとの比較でものを言っている。このように考えるとすべての物事は何か他のものごとがないと存在できないのである。これが「諸法無我」である。

この「諸行無常」と「諸法無我」の二つが真に実現された社会。つまり「涅槃寂靜」が実現された社会これこそが仏教的に見て「平和」な社会ということである。これは私がこの章のはじめに述べた「すべての人間の心が真に平安であるのならばそれは平和な状態であるだろう」という考えにつながるだろう。実際にこの「涅槃寂靜」の世界が訪れるためにはどのようなことに取り組めばいいのか。その方法については次章で語ることとする。

### 第3章 平和のために世界市民がすべきこと

平和のために世界市民がすべきことそれは「諸行無常」と「諸法無我」の二つの真理を悟ることというのが仏教的解釈になるわけだが、世界人類すべてが仏教者ではない。しかし真理というものは知っているようと知っているまいとすべての生物に影響しているのである<sup>(15)</sup>。よって仏教で語られた真理というものは他の宗教の中においても真理として語られているであろうものではないかと考える。もしそうであるのならばこの真理を自らが信仰している宗教の中から見つけ出しその教えを信じ、広め、平和の実現のための努力をすべきなのではないだろうか。たとえどんなに貧しくとも、富んでいようとも、文字が読めなくても、読めても関係ないのではないか。なぜならば信仰という行動。つまり信じてまたそのことがらを祈り、その実現のために努力するということはすべての人に平等にできることなのだから。ここまで「努力」とか言ってきたがその「努力」とは具体的には何をすることなのだろうか。

私はこう考える。それは相互理解に他ならないのではないか。

争いというものは自らの考えを、異なる考えをもった集団に力強くでも納得させ正当化しようすることだと考える。しかしここで相手のことを理解しようとすればどうなるだろうか。こうなるのではないか。互いの意見をまず出しあったうえで互いの集団が双方ともに利益を得

るような新しい考え方を生み出すのではないかと。互いの考え方、気持ち、心、状態……etc. を理解しようとするのならば、必ず相手の立場になって物事を判断していくことになるだろう。その時点で争いあってはいた2つの集団は平和を求める1つの集団に変化する。このことを仏教的に解釈するのであるのならば、さまざまな「変化」のなかで争っていたものが互いに同じ存在なのだという「関係」に気付いた。それによって平和が訪れた。つまり「諸行無常」と「諸法無我」に悟り、「涅槃寂靜」の世界が訪れたということになる。しかし実際の世界ではこのようにうまくはいかないだろう。そこで最後の章で語られる現代社会における仏教の果たすべき役割というものが重要になっていくのではないだろうか。

#### 第4章 現代社会における仏教の果たすべき役割

最後に私の考える現代社会における仏教の果たすべき役割というのをあげておきたい。現在の世界情勢の中で特に争いが起きているのはキリスト教世界 vs. イスラーム世界であろう。この争いの歴史は自らの力だけでは打破できないところまでできているのではないだろうか。もしもそうであるのならば第三の勢力の仲介が必要になってくるのではないだろうか。その第三の勢力こそ3つ目の世界宗教、仏教、仏教世界なのではないだろうか。

社会的に見ればこの仏教世界つまりアジアという世界は一番広大である。その力のすべてを結集すればこの争い、いざこざを打破できるのではないか。

また宗教的に見てみると、仏教世界というものは仏教のみならずその土地に存在していたさまざまな宗教と共に存を果たしてきている歴史がある。つまり「共生」の道を模索し、実現してきたという歴史がある。この「共生」の歴史は他の世界宗教には見られない大きな特色であるだろう。ならばこの仏教という宗教はほかの二つの世界宗教とも「共生」の道が模索、実現できる可能性を秘めている。このような「共生」を実現してきた要因のなかには、これまで述べてきた「相互理解」というものが存在したのではないだろうか。この「相互理解」をキリスト教世界やイスラーム世界に根付かせることができるのであるのならばこの世界全体が「共生」の名のもとに一致団結していくのではないか。

ここまで書いてきているが、すでに宗教者や研究者のなかではこのような動き「異宗教間対話」が実現されてきている<sup>(10)</sup>。しかし一般市民の中では今ひとつ展開されず知らずにすごしている人のほうが多い。であるのであるならば、「異宗教間対話」を民間レベル、草の根レベルまでおろしていくことがPointになっていくのであろう。しかしこれは仏教者だけではなく、「異宗教間対話」のことをしていてそれを重要視しているものすべての人のすべきことなのだろう。

#### さいごに（まとめ）

ここまで述べてきたことは、私が願っている平和な世界のおとずれの為に私が考えた必要十分条件である。しかしあくまで私ひとりの力で平和の時代が訪れるわけはない。たとえ私が祈りつづけても平和はこないかもしない。しかし祈ることをやめてしまってはそこでTHE ENDであるが、祈りつづけていくのであればその祈りは進行形でいつかかなうかもしれない。そのような考えは私が仏教を信仰していく上で身に付けてきたものである。そのような意味ではこの論文のテーマ「宗教の平和への貢献」の答えは、「真に平和を祈る宗教者に勇気と希望を与えること」なのかもしれない<sup>(11)</sup>。以上でこの論文を終わる。

## 註

(1) 「無量義經」は3品構成「徳行品」、「說法品」、「十功德品」の3つ『新しい法華經の解釈』21頁、『法華三部經 各品のあらましと要点』より。

(2) 「妙法蓮華經」の二十八品

序品 方便品 譬喻品 信解品 葦草喻品 授記品 化城喻品  
五百弟子受記品 授学無学人記品 法師品 見宝塔品 提婆達多品 勸持品 安樂行品 從地涌出品  
如來壽量品 分別功德品 隨喜功德品 法師功德品 常不輕菩薩品 如來神力品 嘴累品  
藥王菩薩本事品 妙音菩薩品 觀世音菩薩普門品 陀羅尼品 妙莊嚴王本事品 普賢菩薩勸發品

（『新しい法華經の解釈』21頁～、『法華三部經 各品のあらましと要点』より）

(3) 法華經の中の書かれているたとえ話を7種類あることから「法華七喻」（ほっけしちゆ）と呼ぶ。

以下はその「法華七喻」の名称と載っている品。

三車火宅のたとえ……譬喻品第三 長者窮子（ぐうじ）のたとえ……信解品第四  
三草二木のたとえ……葦草喻品第五 化城宝所のたとえ……化城喻品第七  
衣裏繫珠（けいじゅ）のたとえ……五百弟子受記品第八 菩中明珠のたとえ……安樂行品第十四  
良医治子のたとえ……如來壽量品第十六

（『新しい法華經の解釈』21頁～、『法華三部經 各品のあらましと要点』より）

(4) 『新しい法華經の解釈』21頁～、『法華三部經 各品のあらましと要点』より。

(5) 末法とは仏法が見失われる時代のことと大混乱が訪れるとされる。この時代こそ法華經のひろまる時代とされ、現代はこの末法の世とされる。『新しい法華經の解釈』608頁より。

(6) 『新しい法華經の解釈』529頁～より。

(7) 『新しい法華經の解釈』505頁～より。

(8) 『新しい法華經の解釈』367頁～より。

(9) 『新しい法華經の解釈』338頁～より。

(10) 『新しい法華經の解釈』338頁～より。

(11) 庭野日敬氏の平和觀を表した言葉をあげておく。

仏教では「不殺生」ということを一番の重要な戒律としています。いのちの尊さ尊厳を教える根本に据えているからこそ殺し合いをやめて、尊重していく大切さを説くのです。そして復讐的態度、暴力的態度を強く戒めます国際的な緊張感が高まっている現在こそこの「不殺生」「非暴力」という精神を第一義とした問題解決の道筋が重要です。」（『佼成新聞』2002.11.15より）

危険を冒してまで武装するよりも、平和のために危険を冒すべきである。（1978.6.12国連スピーチより）

また私の考えは庭野日敬氏の著書『心田を耕す』の第2章「いのちの尊さ」を参考にしている。

(12) 『新しい法華經の解釈』81頁～。

(13) 『新しい法華經の解釈』81頁～、『心田を耕す』第1章「無常を生きる」より。

(14) この「諸行無常」、「諸法無我」、「涅槃寂靜」、「一切皆苦」の4つのことを「四法印の真理」という。『新しい法華經の解釈』312頁～、『心田を耕す』第1章「無常を生きる」より。

(15) 『新しい法華經の解釈』「はじめに」より。

(16) 宗教界では「世界宗教者平和會議」（WCRP）というものが存在する。学術界では宗教をテーマにした学会でこの問題が取り扱われている。『この道』135頁～、『地球時代の良寛』第1部より。

(17) 庭野日敬氏は長年の功績をたたえられ受賞したテンプルトン賞の授賞式でこのようなことを述べている。

今回のテンプルトン賞受賞は神仏が「迷わずしてその道を行け」とお示しくださったものと私は受け止

めています。(1979テンプルトン賞受賞式スピーチより)

#### 参考文献

- 庭野日敬『新しい法華經の解釈』校成出版社（昭和61年）。
- 庭野日敬『法華經各品のあらまし要点』校成出版社（平成3年）。
- 庭野日敬『この道』校成出版社（平成11年）。
- 庭野日鑑『心田を耕す』校成出版社（平成10年）。
- 『校成新聞』校成出版社。
- 『春光』校成出版社。
- 延原時行『地球時代の良寛』考古堂（2001）。

(卒業論文指導教員 延原時行)